

『昔話のような現代劇』

神様はずっと一人だった。

いつからかわからないくらい一人だった。神様は一人でいる事に嫌気がさして自分に似た生き物を創った。それを宇宙の中に放り込んで決して触れ合わず、観察した。試行錯誤を繰り返して創った「人」はいつしか神様の手を離れ歩き出した。

歩き出した人々は神様の手に負えないほどの孤独をつくって、神様に見せつけるかのように増えていくのだった。ある兄弟は生きるために苦しみ、ある少女は心を閉ざし、ある男は逃げ出し、ある少年は恐怖で自分を見失った、ある者は……。

神様はそんな人々を目の当たりにする度に壊れていくのだった。神様が悩み、苦しみ、死んでいく。その一部始終を見ていたものがあつた。

宇宙の上では神様をつくった何者かが話していた。次の神様の相談だった。傍観者はそれを繰り返すたび同じように壊れていく自分を確認したが、もはやどうする事も出来なかった。この世界は終わりなく続いていく事を知っていたから。